

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	LANGE KRISS ALEXANDER
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
Factors Affecting Aural Decoding Ability for Japanese EFL Learners			
論文審査担当者			
主 査	教 授	小野 章	
審査委員	教 授	松浦 伸和	
審査委員	教 授	畑佐 由紀子	
審査委員	准教授	西原 貴之	
審査委員	教 授	達川 奎三（外国語教育研究センター）	
〔論文審査の要旨〕			
<p>日本人英語学習者にとって聴解は最も難しい技能の1つである。近年、発話インプット中の語を同定する能力（ディコーディング能力）が、聴解能力と強く関わっていることが示されてきている。本研究は日本人英語学習者の聴解能力向上のための指導法に関する示唆を得るべく、(1) 日本人英語学習者のディコーディング能力はどの程度か、(2) 日本人英語学習者の聴解能力はディコーディング能力と本当に関わっているのか、(3) 日本人英語学習者はどのような言語的要素のディコーディングを難しく感じるのか、という3点を調査した。</p> <p>第1章では、本研究の目的、背景、及び論文の構成について述べた。</p> <p>第2章では、先行研究で提示されているL2聴解モデルの中にディコーディング能力を位置づけ、この能力が聴解において極めて重要な機能を果たしていることを示した。特に、音変化（音の同化、省略、挿入など）した表現や機能語（前置詞や代名詞など主に文法的な働きを行う語）の弱形（強勢を受けない場合の発音）を自然なスピーチの中で正確に同定するディコーディング能力の向上が学習者の聴解能力向上の鍵となる点を確認した。</p> <p>第3章では、日本人英語学習者の機能語のディコーディング能力の実態が調査された。具体的には、弱形の機能語を含んだ例文を自然な音変化を伴った形と音変化をさせない形で学習者に聞かせ、学習者のディコーディングのパフォーマンスの比較を行った。結果として、(1) 学習者は音変化を伴う発音を聞くことを苦手としており、音変化を伴わない発音を聞く時と比べてディコーディングのパフォーマンスが20%程度低下してしまうこと、(2) 音変化を伴う発音を聞く場合は/h/音で始まる代名詞の聞き取りを特に苦手としていること、(3) 機能語の音変化に関する知識の乏しさや統語情報の無視がディコーディングに関する問題を引き起こしている可能性があること、が示唆された。</p> <p>第4章では、ディコーディング能力の聴解における重要性をさらに確認するため、同じく聴解と関わりとされるメタ認知意識とどちらがより強く聴解と関わるか、相関分析を行った。その結果、ディコーディング能力の中でもとりわけ弱化した機能語を正しく聞き取る能力が聴解と強く関わっており、その相関はメタ認知意識よりも強いことが示された。</p> <p>第5章では、ディコーディング能力と聴解能力の関係をさらに明らかにするため、同じく</p>			

聴解と強く関わるとされる語彙聞き取り能力とどちらが聴解と強い相関を示すか、さらに重回帰分析でどちらがより高い予測力が示すか分析を行った。その結果、(1) 全体的にはディコーディング能力の方が語彙聞き取り能力よりも強く聴解 (TOEIC と英検準 2 級両方) と関連していること、(2) ただし、最頻 1,000 語の聞き取り能力に限定すると、聴解能力の予測力はディコーディング能力よりも高いこと、が示された。以上の結果から、ディコーディング能力は聴解能力と強く関わっていることが追認され、さらに高頻度語の聞き取り能力も聴解と強く関わることを示された。

第 6 章では、日本人英語学習者がディコーディングエラーを引き起こす要因が記述された。まず、**paused transcription test** (ところどころで音声を止め、音声停止直前に提示された音変化を伴う 3 語の語句を書き取らせる課題) を行い、特に正答率の低かった 10 の設問が抽出された。そして、調査参加者の中で比較的英語力が高い 5 名と低い 5 名に再度その 10 問に取り組んでもらい、1 問ごとになぜその誤りを犯したのか、何が難しかったのか、などインタビューを行った。その結果、(1) 音変化を伴う語が含まれている基本的なコロケーションの知識が不足していること、(2) 実際に聞き取った情報に優先して特定の統語知識を強引に適用してしまうこと、(3) 実際にディコーディングをする箇所の直前の表現を誤解していること、(4) 日本語的な発音の英語に慣れてしまっていること、がその要因として示された。

第 7 章では、本研究の総括を行い、教育的示唆と今後の課題を述べた。教育的示唆として、(1) 弱形のディコーディング方法とコロケーションについて明示的に指導をする必要性、(2) 自身の文法知識を活用しながらディコーディングをさせる必要性、(3) 英語の自然な発音に触れる機会を増やす必要性、(4) 学習者の聴解における問題点をさらに細かく調べて指導に活用していく必要性、(5) 高頻度語の聞き取り能力を向上させる必要性、(6) 日本語発音からの脱却の必要性、が示された。また、今後の課題として、(a) 対照群を設けた調査方法によってディコーディング能力が聴解に及ぼす影響やディコーディングエラーの原因をより詳細に調べる必要性、(b) より多くの学習者からデータを収集する必要性、が指摘された。

本論文の独創性は以下の 3 点にまとめられ、学術的及び教育的意義を高く評価することができる。

1. これまで研究が不足していたディコーディング能力、とりわけ音変化を伴う高頻度語の聞き取りが日本人英語学習者の聴解能力に極めて重要な影響を及ぼしていることを様々な分析手法を用いて実証的に明らかにしたこと。
2. 日本人英語学習者の聴解に問題を引き起こしている要因を実証的に明らかにしたこと。
3. 研究結果に基づいて、日本人英語学習者の聴解能力を向上させるための方策が具体的な形で提示されていること。

本研究は、多くの日本人英語学習者を悩ませている聴解能力について、そのつまづきの原因を明らかにした上で、どのようにすればこの能力を向上させていくことができるか、実際の授業の中ですぐにでも応用できる方法を提示しており、今後の英語教育にとって重要な示唆をもたらしている。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士 (教育学) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3 年 7 月 26 日